

9) パンジー

パンジーはスミレ科の一年草で北ヨーロッパ原産の『*Viola tricolor*』から改良されたものである。日本では一つの花に3色があらわれることから、三色スミレと言われてきたが、最近ではむしろパンジーの方がとおりがいい。古くは『人面草』などとも呼ばれており、これは花の咲く風情に、どこことなく人の面影が感じられるためである。フランス語の『pensee』(パンジー)はもともと『思想』とか『瞑想』とか、考えるという意味である『penser』に由来しており、この花の姿が物を考えている人間に似ていることから名付けられたものである。また『我思う、故に我あり』といった、フランスの哲学者パスカルの著書『パンセ』も同様の意味である。学名は『*Viola wittrockiana*』で、種小辞は植物採集者の名前に由来する。日本に渡来したのは江戸の末期1860年代のことであった。

シェークスピアの『真夏の夜の夢』の中では、恋の媚薬としてこの花のエキスが登場する。眠っている人の目蓋にこのエキスを塗っておくと、目覚めたとき最初に見る人と、恋に落ちるといのである。試してみたいところだが、どちらかといつこの恋は『love-in-idleness』で、怠惰な恋、無駄な恋程度のものを意味しているらしい。原作でもあまりよい結果にはなっていないので、やめておいたほうが無難かも知れない。またドイツでは5枚の花弁のうち、上の2枚の花弁を地味なドレスを着た継子に、下の3枚は派手なドレスを来た継母とその連れ子に見立てている。これは上部2枚の花弁の色が単色であるのに対して、下部3弁の色が美しく変化することに由来するものであろう。切り花はクロッカスなどと同様、聖バレンタインデーには欠かせない花になっている。

パンジーは寒さにも強く、真冬でも少し保温をしてあげればポツポツと花を咲かせてくれる。花の乏しい季節に貴重な存在なのだが、他の花が咲く頃になると、ついついこの花のことを忘れてしまい、世話も怠ってしまう。1月頃から3月頃までは、室内に置いてプランターで育てて、以後は露地に植えておくとよい。ただ暖かいところに置いておくと、アブラムシが付くことも多いので、こんなときは牛乳を少し薄めて、噴霧器でかけてあげると退治できる。屋外であればマラソンの水溶液も効果的だが、牛乳であれば小さな子供がいたりしても、室内で安心して使うことができる。ただし後で噴霧器を洗っておかないとノズルが詰まってしまう心配がある。

パンジーはもともと3色だが、最近ではむしろ白とか黄色とか、紫とかオレンジとか1色のものの方が人気が高いようである。1株100円前後で購入できるので、たくさん植えておくとより美しい。また長い期間を咲き続けるので、植え込む時には十分に肥料を施しておきたい。3月頃追い肥えとして化成肥料を与えてあげるのもよいのだが、気温が上がってくるとどうしても花がこぼりになってしまう。しかしこれは毎日咲き競う、その数に免じて許してあげることにしよう。



ヨーロッパを思わせるような庭園が広がる『ハイジ村』(山梨県北杜市フラワーセンター)。



山梨県フラワーセンターは2006年4月1日にテーマパークとしてオープン。以来ハイジ村として多くの人から親しまれている。これは同年4月オープン直後の写真である。



ハイジ村のパンジー。ここのさまざまな装飾方法は、花壇作りの参考になる。



パンジーの花、もはや3色すみれの時代は終わり、いまでは単純な色彩の中に、覆輪やぼかしが入るような品種が好まれている。この花もその典型の一つである。



パンジーの花



パンジーの花、これは覆輪の典型である。しかし花の大きさは以前よりも大きくなってきている。パンジーも量より質が問われているのかもしれない。



パンジーの花



これは単色パンジーの代表である。パンジーの花色の基本は青色系、紫色系、黄色系、白色。このエンジ色系のものはむしろ少数派である。



パンジーよりもずっと小ぶりの花を一面に咲かせるヴィオラ。

[目次に戻る](#)